



ミッテル・オイローパとはどこにあるのか？(一)

水田, 恭平

(Citation)

近代, 119:1-16

(Issue Date)

2019-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81011246>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011246>



ミッテル・オイローパはどこにあるのか？ (一)

水田 恭平

1. 「ドイツの読者へ」

ジョージ・スタイナーの『言語と沈黙』のドイツ語版が一九七三年に出版されるとき、スタイナーはドイツの読者に向けた特別な序文を書いている。「ドイツの読者へ」と題されたその序文は次のような導入部とともに始まる。

* 「この本のドイツでの出版は私にとって複雑な出来事です。『言語と沈黙』は幾つかの言語で出版されています。ハンガリー語、スウェーデン語、そして日本語ですら刊行されているのです。ドイツ語版の刊行はしかし、それ自体ひとつの出来事です」⁽¹⁾。

いかなる意味において、ドイツ語版の刊行が「複雑な出来事」であり「ひとつの出来事」であるのか。それを特にドイツでの読者に向けて説明することそれ自体が、不可欠なこと、特別なこととしてスタイナーには意識されてい

る。ドイツ語版『言語と沈黙』のこの序文を一九七〇年代末にはじめて読んだ時、わざわざこのような「断り」を入れねばならないことに強い印象を与えられた。最近ハンナ・アーレントのいくつかの文章を読む機会に、何故かそれを思い出し、読み返してみた。

由良君美たちによって日本語への翻訳は一九六〇年代末になされ、出版された。そこには当然ドイツ人読者に宛てたこの序文の翻訳はない。その代わりに「日本の読者へ」という序文の翻訳がある。それを讀むと、『言語と沈黙』本文が扱う諸問題、特に「文明と野蛮との関係」への告発という主題の提示が簡潔にされている。それは、序文「ドイツの読者へ」が孕んでいたものと重なる。では、『言語と沈黙』ドイツ語版が、日本語やハンガリー語やスウェーデン語への翻訳と異なる独自の性格をスタイナー自身に持つ意味とは何なのか。それを「ドイツの読者」という序文はどのように説明しているのか。『言語と沈黙』出版から約半世紀の時間の経過を語っている。現在ヨーロッパは(も)、様々な困難な問題に遭遇しているが、その問題との関連において、この序文と本文が描き出す主題は、この約半世紀の時間を経て今なお何かが有効性とも言うべきものを有しているのか。つまり残念ながら今なおこの主題はわれわれに有意義なものであり続けているのか。この問いを一つのきっかけとして、ハンナ・アーレントを始めとする、同じ中央ヨーロッパを出自に持つ人々の仕事を、現在ヨーロッパが遭遇していることとの関連において検討することへとつなげていければ、という思いでこの文章を書きはじめている。

スタイナーは冒頭に引用した導入部の後、以下のように自己の経歴を語る。

*「私の父はプラハの北にある小さな村の出です。彼は若い時にウィーンに出て、それからパリとニューヨークでキャリアを積みました。この遍歴、私的なことと世界危機との絡まり、それは彼の個人的な実存というものを混乱に満ち

た我々の世紀に典型的なものとしてくれます。彼は旅の途上死にました。私の母はウィーンっ子です。その祖先は東ヨーロッパであったり、アルザス出身だったりします。だから文化の多様性、そして言語的な多様性は彼女の本質そのものを規定していました。私はパリに生まれ、そこでアメリカン・スクールに通いました。戦争中に移住したニューヨークでは、フランス語の学校、リセに通いました。そこには当時亡命先ということでも優れた教師たちがいたので。私は大学教育をオックスフォードで終えると、その後の何年かを殆どイギリスで過ごしました」。

なぜスタイナーは自己の経歴の前に、両親について語るのか、あるいは、語らねばならないのか。それは、彼と両親とを結びつけているものと、かつ、両親との間に走る亀裂、それを前提にした自己があるからだ。

父がプラハ近郊の出であり、母がウィーン出身であることは、両親が典型的な中央ヨーロッパ（ミッテル・オイロパ *Mittleuropa*）出身であることを示している。それに対して、スタイナー自身はパリ、ニューヨーク、オックスフォードという場が示すように、西ヨーロッパ、アメリカにおいて育ち、教育を受けている。にもかかわらず彼は何よりも両親との関係を語ることをもって、この特別な序文を始めている。それは何故なのか。中央ヨーロッパと西ヨーロッパとの間で何が生じているのか。

*「私はフランスで成人になり、学校では英語の教育を受けてきたとはいえ（私の父は英語に将来性を予感していたのです）、私の知的なバックグラウンド、そして私の感受性というものは中央ヨーロッパ的なものそのものでした。父が私に伝えようとしたもの、すなわち、彼が精神的に身に付けていたもの、知的な、そして精神的な価値観は、レッシングからフロイトに至る流れに特有の人文主義そのものだったのです。言い換えれば、ヴァンケルマンのギリシ

ヤ精神、啓蒙思想が打ち出す合理主義、そこに己が根つ子を持つ人文主義であり、ゲーテのなかにヨーロッパ的精神のマイスターを、そしてハイネのなかに宿なし者の特別な天才を見出すような人文主義なのです。イブセン、ゾラからトルストイに至る人々に明確に存在するラディカリズムの流れを受けとめ、しかもワーグナーへのアンビヴァレントな関係をも展開させる伝統と言ってもよいでしょう」。

スタイナーはここで、自身が両親から引き継いだものを「中央ヨーロッパ的人文主義 der mitteleuropäische Humanismus」と総括している。つまり父が彼に伝えようとし、彼がそれとして受け止めたものである。だからこそ、両親、とりわけ父のことから語り始めねばならないと彼をして思わせた。

この「中央ヨーロッパ的人文主義」とは一体いかなるものなのか。それは、先の引用にあるように、ギリシャ精神、啓蒙思想、合理主義等々が十八世紀から一九世紀の何人かの天才のなかに体现されたものだ。そしてそれは代表的都市やそこに活躍した人々の名前によって具体的に示されている。「この中央ヨーロッパ的人文主義は、マルクス、フロイト、アインシュタイン、シェーンベルク、カフカ、そしてフォン・ノイマンという名前と共に、ベルリン、ウィーン、プラハ、ブタペストという都市とも関係して、現代的な精神の形式、精神的な構えというものを形作ってきたのです」。これらの人名と都市名が示しているように、スタイナーにとって「中央ヨーロッパ」が問題となるのは、何よりもそこがドイツ人とユダヤ人の稀に見る共同作業の場であったことによる。そこにあるのは「ある時は調和に満ちた、ある時は緊張した、ドイツ人とユダヤ人の合同作業 Kongruenz」である。つまり、中央ヨーロッパ的人文主義と言われるものがユダヤ的な要素を不可欠なものとしてその中に含み持っていた、それが父親経由で彼

に引き継がれている、と言うのである。

ここでスタイナーが「中央ヨーロッパ」という言葉で表現している地域、それはドイツ・オーストリアとも言われていて、歴史的には明らかにかつての神聖ローマ帝国の拡がりと同なる。ただし神聖ローマ帝国と言っても、歴史的にその拡がりも大きくもなり、また縮小もしてきたから、「中央ヨーロッパ」がびったりと神聖ローマ帝国と同なるわけでもない。また神聖ローマ帝国解体後のドイツ帝国、オーストリア・ハンガリー二重帝国の版図の拡がり、さらにはその周辺部と、曖昧さを持つ。そこに含まれる都市群もスタイナーの挙げる都市名にクラクフや他の都市を加えることができるだろう。

エリアス・カネッティは自伝三部作の第一作『救われた舌』を、ドナウ川下流の港町ルスチュクでの幼年時代について書くことから始めている。そこには、ルスチュクからドナウ川を遡り、ウィーンに行く人がいれば、「彼はヨーロッパに行く」と言い、また、ヨーロッパはトルコ帝国の命運が尽きたそこ（ウィーン）から始まるのだ、という記述がある⁽²⁾。この「ヨーロッパ」は正確には明らかに今スタイナーの言う「中央ヨーロッパ」のことを指している。

そしてこれらベルリン、ウィーン、プラハ、ブタベスト……という都市名が示していることは、「中央ヨーロッパ的人文主義」と呼ばれているものが明らかに都市文化であることであり、都市に住んでいるドイツ人とユダヤ人によって担われたものであった、ということだ。

「中央ヨーロッパ」のさらなる重要なメルクマールは、神聖ローマ帝国という支配秩序と深く関連することだが、共通語としてのドイツ語が決定的な役割を果たしてきた地域ということである。ハンナ・アーレントもまた、その『暗い時代の人々』のベンヤミンを論じた章で、ベンヤミンやカフカに共通する空間として「ドイツ語を話す中央ヨーロッパ das deutschsprachige Mitteleuropa」という表現を使っている⁽³⁾。

そのような中央ヨーロッパにおいて形成された文化を特徴づける「ドイツ人とユダヤ人の合同作業」について、以下の文は記している。

*「ユダヤ人がドイツ・オーストリアの文化に、知的、芸術的、学問的領域でとてつもなく大きな貢献をしました。ユダヤ人がまさにドイツという領域で自己実現の可能性を見出したのは、それは何百年か前にイスラム下のスペインにおいてだけ提供されたことと似ていますが、ひょっとしたらドイツという国自体が長い悲惨な分割の時代の後で、ようやくそのアイデンティティを獲得したと関連があるのかもしれませんが。私の父の書庫にはこの部屋は私にとって本当の教室だったので、スピノザやヘルツルと並んで、レッシング、ゲーテ、シヨーペンハウワー、そしてトーマス・マンが、ヨーロッパ的な人間性を高らかに歌う声として並んでいました。『Mensch menschu(人間)』という言葉がすでに私にとっては明確にドイツ・ユダヤ的な響きを持つ言葉なのです」。

ユダヤ人とドイツ人の間の共同作業は、ヨーロッパの他のどこの地域よりも、「ドイツ語を話す中央ヨーロッパ」においてこそ、実を結んだ（正確には、イスラム下のイベリア半島もそうだった⁽⁴⁾）。この豊かな果実をしかし、ナチズムとその同盟物スターリニズムが一挙に「拷問の苦しみ」とともに消し去った。スタイナーは、ドイツ人とユダヤ人には共に「人間の極限に向かう潜在能力」が備わっていて、「一方には、容赦ない残酷行為への潜在的な能力、人間を非人間の極限へまで拡大させる意思の力。他方には耐え忍ぶことへの恐るべき能力。この二つの素質は、まるで拷問官と犠牲者との関係のように、解き難く絡み合っていました。カフカの『流刑地にて』は卑猥とも言えるこの絡

みの偉大な説話です。兄弟殺しの場合のように、ここでもまた生じたことは、絶望的な均衡というものがもたらしたものでした」と言う。

そしてさらにスタイナーが書き加える「解き難く絡み合う」、もう一つの「逆説」がある。それは、アドルノ・ホルクハイマーが「啓蒙の弁証法」と呼んだものだ。スタイナーがこの主題を選びとる、というのではない、この主題が彼自身を捉えて離さないのだ。

*「私の仕事のすべては、緊急の問いをめぐるものです。すなわち、非人間性の根っ子は、高度の文明の根っ子と果たして絡み合っているのか、というものです。アウシュビッツはジャングルから出てきたものではありませんし、スナップから生じたものでもありません。野蛮は、文化や芸術、普遍主義的な教育、自然科学の奇跡といったものの中にいる現代の人間に襲いかかったのです。最も美しい美術館や図書館、コンサートホール、といったものからわずかに数キロしか離れていないダツハウ（*ミュンヘン郊外の強制収容所）では、空気が汚染されていました。昼間に拷問をし、子供を絞首刑にしていた男たちが、夕べにはリルケを読み、シューベルトを聴いていたのです。それは存在論的な謎であり、文明化された倦怠の神秘であり、あるいは悪の神秘です。そして私には人類の未来そのものに疑問符が付けられる事です。人文主義的学問が人を真に教化することに何も寄与しないならば、またバッハを演奏する同じ人間がヴィリニウスのゲッター（*バルト三国の一つ、リトアニアの首都で、ユダヤ系文化が栄えた。ナチ政権はそのユダヤ人居住地をゲッターへと変容させた）に火をつけることができるのなら、文明というものは一体どこにあるのでしょうか？ 何のために教育というものがあるのでしょうか？ また何のために読書ということがあるのでしょうか？ 古典的な人文主義自体に、その抽象性と美的価値判断への傾向にそもそも激しい拒否というものが内在している

ということがありうるのでしょうか？大量殺戮や、そういうぞっとするものへの無関心さ——それがナチを助長したのですが——が、文明の敵であったり否定ではなくて、むしろその恐ろしい、しかし自然な共犯者である、ということがありうるのでしょうか？」

「昼間に拷問をし、子供を絞首刑にしていた男たちが、夕べにはリルケを読み、シューベルトを聴いていた」という「存在論的な謎」。人文主義のあれ程までの成果が何故あれ程までの野蛮に結びつくのか。しかし、『言語と沈黙』という書物は、この問いに直接答えるというよりは、この問いをより明確な問いにすることを目指す。そのために、「ドイツ語という言語の内面性 *das innere Leben der deutschen Sprache*」が扱われる。というのも、「言語は人間の振る舞いの本来的な要素であるが、その程度に応じて、人間性の極限的な危機の痕跡が言語に刻み込まれているから」と言うのだ。つまり、「リルケ・シューベルトとダッハウの間の関連」（＝啓蒙の弁証法）が生じたのが他でもなくドイツである限り、『言語と沈黙』という書物はドイツ語の内面を探ることにならざるを得ない。

厄介なことにはドイツ語はスタイナーにとり「私自身の言葉でもあり、しかし同時に懲戒的な拒絶を意味する言語」でもある。だからドイツ語の内面に降りて行く『言語と沈黙』という書物のドイツにおける出版は、「何にも勝る重要なことであるけれど、同時に特別な苦痛」を強いられることでもあるのだ、と序文は告げる。これはもはや書物冒頭に掲げられる序文という枠組みを破壊してしまっているようだ。

2. 「ある意味での生き残り」

2・1 『言語と沈黙』本文に収められた「ある意味での生き残り —— エリ・ヴィーゼルに」、そして「ある意味で

の生き残り・補遺」という二つの文書は、「ドイツの読者へ」が訴えようとしたことをより詳細に展開している⁽⁵⁾。そこで、ここでは特に「ある意味での生き残り——エリ・ヴィーゼルに」から幾つかの論点を取り出し、後にハンナ・アーレントの「パリア」という主張と比較し検討をするための準備としておきたい。

「ある意味での生き残り——エリ・ヴィーゼルに」を読むわれわれがまず立ちあわされるのは、スタイナーの語り方の「屈託」である。スタイナーはたまたま「その場」に居合わせなかった、しかしその「ヨーロッパで起こった暗い出来事」は、彼自身の現在のありかたと切り離すことができない、と言う。彼の振る舞い方が、今親しくしている人たちに、「どれほど底意地悪く、わざとらしいものと思われるかもしれないが」、と含みのある留保をつけながら。

その上で、スタイナーはどのような論点を差し出すのか。「中央ヨーロッパ」から「生き残り」として逃れることになったことが、スタイナーにとっても問題となる。「スタイナーにとっても」というのは、彼自身は「そこに居合わせる」ことがなかった」からだ。彼が繰り返し語るように、父親の「見通しの良さ」のおかげで、両親は一九二四年にはすでにウィーンを離れパリに行き、そのパリで一九二九年に彼は誕生している。そして一九四〇年には一家はパリを離れ、アメリカに逃れていて、直接的にはナチズムの迫害をまぬかれている。にもかかわらず彼は自らを「ある意味での生き残り A Kind of Survivor」と規定する。「ある意味での」という付加語を加えねばならない理由が問題となる。父親世代の人たち、それも彼の父親のような「見通しの良さ」を持たなかったから、あるいは、持っているにもかかわらず、その身にナチズムの暴力を直接に被ってしまった人たち、彼らが幸運にもそこから逃れられた場合にこそ、「生き残り」という意識は正当化されるだろう。しかし、スタイナーは「ある意味での」と付け加えながら、「生き残り」と自己規定する。

そのような彼の立ち位置を浮かび上がらせるものが二つある。一つは、アメリカのユダヤ系の人々との差異に言及

することに由る⁽⁶⁾。なるほどアメリカにも反ユダヤ主義的傾向はある。そして大抵のアメリカのユダヤ人もそれには気がついている、しかし、それは「穩健でひそやかなものにとどまっていこう」と言う。このようにアメリカのユダヤ系の人々について語ることは当然、対比的に「ヨーロッパ」という観点を浮かび上がらせる。つまり、スタイナーがニューヨークで、あるいは、シカゴで知り合った多くのユダヤ系の人がかつて「移民」としてアメリカ合衆国に辿りついた人々であったり、その子孫であるのと対照的に、彼は戦争下のヨーロッパからの「ある意味での生き残り」としてアメリカに辿りついた。この自己認識が彼をしてアメリカのユダヤ人との差異へと押し出している。

もう一つは、同じユダヤ系でも正統派あるいは伝統的ユダヤの人々との差異である⁽⁷⁾。スタイナーは、伝統的ユダヤ人とは異なるユダヤ系中産階級の人々の役割に大きな意味を持たせている。一九世紀のヨーロッパに進行した「同化」のもと、世俗化し、市民階級へと浮かび上がったユダヤ系のエリートが果たした役割だ。彼らは多く、伝統的ユダヤ教の教えから離れていき、そのユダヤ的感性は「感覚的であり同時に抽象的でもある想像力の力」へと解き放たれ、「中央ヨーロッパ的人文主義」という文化から多くの果実を得ただけでなく、それに大きな貢献をした。「中産階級 bourgeois」あるいは「中産階級の bourgeois」という単語をイタリックにすることで、ユダヤ系中産階級と中央ヨーロッパ人文主義との関係の深さが強調される。その関係の深さからはじめて「人文主義と蛮行」「文明と野蛮」の逆説が見えてくる。中央ヨーロッパの人文主義への貢献、にもかかわらず（だからこそ）そこから受けた徹底的な排斥・抹殺、ということについては『言語と沈黙』全体が明確に述べるところだが、このような分析の背後には明らかにスタイナー自身の恵まれた出自への冷静な眼差しが働いている。

2・2 さて経済的に恵まれたユダヤ中産階級というものを前提にすることがさらにもう一つある。それは「言語」

に關わる。『言語と沈黙』全体が何よりもこの主題に向けられてものであるし、日本語版への序文でも「言語現象そのものこそ、考え直されねばならない」、「言語こそは人間を規定する特徴であり、世界に対する人間の交渉は、その核心において、言語的なものである」と明確に打ち出されている。それにとどまらずスタイナーのその後の仕事全体を貫くものがすでにここに予告されている⁽⁸⁾。

スタイナーは「世界に対する人間の交渉」の例としてしばしば、日常における具体的な言語体験に言及する。彼にとって言語が意味するものは、まず何よりも具体的に話し、読み、書くことである。だから日本語版序文における「日本文学にたいするわたしの知識も、日本語がまるで分らない者の持つ、貧しい性質の知識にすぎない。この無知をわたしは恥ずかしく思う。いつの日か、たとえ片言の程度にでも、この無知を改めたいと願っている」という言葉は、そのまま受け取った方がいい。序文の最後にも、「またわたしが日本語を解さないとこの障壁を飛びこえて頂かねばならぬものである」と、わたしは、本書にたいする反響を期して待つものである。なぜなら、こだまのないところ、いかなる声も消え去るほかはないからである」と念を押ししている。

言語への絶対的な信頼とも思えるこの態度にはしかし当然とても深い翳が与えられている。「その地への異和と非永住の意識の激しさが言語のなかにまで入り込んで」という意識からスタイナーは離れられない。だからその点でもアメリカ生まれのアメリカのユダヤ人との差異、さらには伝統的ユダヤ教徒との差異が意識されることになる。ここからもスタイナーの「中央ヨーロッパ的なもの」という觀念に特有のものが析出されてくる。

つまり、ハイネのドイツ語にも、カフカのドイツ語にも、歴史的地域的な色彩を欠く、汎ヨーロッパ的なものを嗅ぎつけることになる。そしてこの汎ヨーロッパ性は、さらにそのヨーロッパをも超える普遍性への要求を孕む、それによってこそ「中央ヨーロッパ的なもの」が「中央ヨーロッパ的なもの」になる、と彼は捉えているのだ。つまり、

そこにスタイナーの言う「ユダヤ的なもの」が果たしている役割が見出されているし、自らの形成の意味をそこに重ねてもある。

スタイナー自身は言語に関してどのような経験を経ているのか。それが極めて興味深い。幼いころからの家庭環境について、自伝『Errata』（正誤表）の七章冒頭において述べている⁹⁾。それによれば、食堂や居間では英語、フランス語、ドイツ語が飛び交い、幼いスタイナーには子守りの女性がポツダム訛りのドイツ語で話しかけ、台所ではマジャール人女性がハンガリー語を話し、典型的なウィーン女の母親はある言語で言い始めると終りはいつも別の言語に変わっていた、それも無意識のうちに。

彼自身は父親の教育方針に従い、幼いころからドイツ語、英語、フランス語を全く等価のものとして学んでいる。それもすべて完璧に学び、自己のものとしている。さらには古典教育としてのギリシャ語、ラテン語が加わり……。そのような多言語使用は「経験の豊かさ、思考と感情の創造性、概念の鋭敏で繊細な比類のなさ」を彼にもたらす。スタイナーにとって言語はこのように身体的な経験であって、「バベル以降の言語の豊富さ」を実感したのはすでに子供の頃だったが、それは「殆ど肉体的な感動 an almost bodily intensity」であったとまで記している¹⁰⁾。

たとえ「中央ヨーロッパ」では「多言語状況」が前提となっているとしても、またどれほど経済的に恵まれ、知的環境に恵まれ……ということがあったとしても、スタイナーのような言語経験は、明らかに例外的なものだろう。しかし彼の経験において決定的なものはない。彼がその経験と結びつけている観察が重要なのである。その核心部分にあるものは「母語という観念の失効」である。言語を駆使するというよりは、言語という場（いや「

宇宙」と言った方がいいかもしれない)に身体ごと浸らせているような感覚に、「母語」という観念はむしろふさわしいものだろう。にもかかわらずその「母語」という観念からの隔たりが主題となっている。

いわゆる「多言語使用者 polyglot」とって一体何が「母語」なのか、という問いはよく立てられる。それに対して、例えばある人にとっては「ドイツ語圏で受けた教育は決定的な意味をもち、今でもシラーの詩句は寝つかれないときに不意に思わず口にしてしまう。イギリスで育ったのに、シェイクスピアの好きなせりふや英国の抒情詩の一節を思い出すことはなかなかできない。だから私にとっては多分ドイツ語だろうか」とか、「自分の場合は何だろうね・・・、ハンガリー語で夢を見るから、ハンガリー語のかな」とか、という応え方をわれわれは聞かされる¹¹⁾。

それに対してスタイナーのケースは次のようになる。先に自伝『Errata』の七章冒頭の、幼年期の多言語経験について述べられているところに触れたが、そこに彼は次のようにも書いている。「私には最初の基盤となる言語についてのいかなる記憶もなく」(I have no recollection of any first or bed-rock language)。ここでは「母語」という単語が慎重に避けられている。続いてさらに、英独仏の三つの言語のどれが自分にとって優位性を持っているのかという問いに対して、その運用において全く差がないこと、だからその日にたまたま主に使用していた言語で夢を見ること、しかし「その三つの母語」もしばらく聞かなかつたり、日常的に用いたりしてなかつたら、滑らかさに欠けるところが出てくる・・・と答えている。この時に限りなるほど「母語」という単語を使用しているが、慎重に「my three “mother-tongues.”と引用符に包んでいる。また、「三つの母語」という表現はそれ自体で「母語」という観念を失効させるものだ。それ以外の箇所では、スタイナーは原則として「母語 mother tongue」という語を使用していない。明らかに「母語」という観念に対して批判的距離を取っている。

これは一体何を意味しているのだろうか。ハイネ、カフカのドイツ語についてスタイナーが述べたものが、母語と

いう観念からの遙かな隔たり・遠さとなって響いている。彼は、こう書いていた。「その地への異和と非永住がもたらす緊張感は言語にまで入り込んでいる、と私は感じている。……人が自分の土地の岩や大地や木々に対するのと同様、生得の言葉に対して、はるかな過去からずっと無意識のうちに持ち続けているはずの親密さ、それはしかし私たちをすり抜けていくのかもしれない」²²⁾。これは、多言語使用者が支払わねばならない高い「つけ」である。スタイナーはその上で、その「根無し草性 rootlessness」を「国際性 cosmopolitanism」へと組みかえようとする。「なるほど極端な場合、この条件は不愉快なことかもしれないが、しかし、それを受け入れれば、より大きな意味がないわけではない」。このような苦い「屈折」が伴うことを「受け入れた」うえで、スタイナーは、「人間を、人間になろうとする途上にあるものと見るラディカルな人文主義」に立とうとする。このような「人文主義 humanism/ Humanismus」を体現する「中央ヨーロッパ Central Europe/ Mitteleuropa」はしかし今どこにあるのか？

注

- 1 George Steiner: "Language and Silence" 1967 London. のドイツ語版 "Sprache und Schweigen" は一九七三年に出版されてる (Frankfurt a. Main)。"An den deutschen Leser" (ドイツ人読者) と題された序文はその S.7-11。1. で引用するスタイナーの文は、* 印とともに引用する箇所を含み、すべてこの序文からである。
- 2 Elias Canetti (1905 - 1994) : "Die gerettete Zunge". 1977. Frankfurt a. Main. S.11.
- 3 Hannah Arendt (1906 - 1976) : "Menschen in finsternen Zeiten". 2012. München. S.234. アーレントの引用はドイツ語版による。その理由については、アーレントを論ずるときに詳述する。ちくま学芸文庫版『暗い時代の人々』の該当箇所は84頁。
- 4 エリアス・カネッティはその興味深い関連を指し示す実例である。イベリア半島のイスラム支配が「国土回復運動」によって

終焉を迎えると、イスラム下で繁栄を享受していたユダヤ系の人々の多くは、地中海沿岸を東へと、また西ヨーロッパへと逃れて行った。カネッティの祖先は、キリスト教化されたイベリア半島からはるばるヨーロッパの東の端まで移動してきたユダヤ系セファルディで、ブルガリアでは彼らはスパニオルと呼ばれていた。ドナウ川下流ブルガリアの町、ルスチュク生まれのカネッティの家では十五、六世紀のスペイン語の面影を強く残したスペイン語ラディーノが話されていたという。

5 「ある意味での生き残り ― エリ・ヴィーゼルに」『A Kind of Survivor』: P.164-179.

「ある意味での生き残り・補遺」『Postscript』: P.180-193.

ハンナ・アーレント (1906-1976) は、スタイナー (1929-) とは約二十年余りの年齢差があるが、スタイナーとほぼ同時期、一九三三年にドイツからパリへ、さらに一九四一年にフランスからアメリカ合衆国ニューヨークへと亡命している。アーレントがまだアメリカ合衆国の市民権を得る前の一九四三年に、英語で発表した「われら難民: We Refugees」という文章がある。そこに展開された「難民」そして「自覚的パリア」という観念は、スタイナーの「生き残り」という観念との関連において極めて興味深い。

6 「A Kind of Survivor」: P.168-169.

7 「A Kind of Survivor」: P.170-171.

8 『言語と沈黙』日本語版は一九六九年、一九七〇年に二巻本として出版された。その序文「日本の読者へ」。ここでの引用は二〇〇一年に出版された版 (5-7頁) による。

9 「Errata」. 1997. London. P.87-88.

10 「Errata」. 1997. London. P.100.

11 Eric Hobsbawm (1917-2012) : 「Interesting Times」. 2002. (『興味深い時代』のドイツ語版『Gefährliche Zeiten』. 2006. への序文から (S14)。

ホブズボウムは現代イギリスの歴史家として知られているが、実はエジプト・アレクサンドリア (古代ローマ帝政期には人口百万人超。ここではディアスポラ下のユダヤ人がギリシヤ人に次ぐ人口比を誇った) 生まれ。ウィーンで少年時代、青年時代を過ごし、その後ベルリンでの二年間の体験が共産主義者ホブズボウムを形作り、さらに一九三三年ケンブリッジへとという経歴を

もつ、典型的二〇世紀のユダヤ系の *displaced person* である。その彼にとってもドイツ語圏で受けた教育は決定的な意味をもつ。最初のシラーの詩句についての思い出は彼自身のもの。次のハンガリー語で夢を見るから・・・という例は、ホブズボウムの友人、ジョルジュ・アウプトのケース。アウプトもまた多言語地域のカルパチアに生まれ、アウシユビッツ生き残りで、ソヴェエト連邦で学び、パリ、ルーマニア、ロンドン・・・と移り住んだ。

12 この段落の引用文は、*"A Kind of Survivor"*, P.175-177. かし。

(みずた・きょうへい　ドイツ文化)